「軍機保護法」で懲役15年の極刑

全くの冤罪、宮澤弘幸さん27歳で落命

登山と旅行の好きな宮澤さん

12月8の一斉検挙日

1941年12月8日、ラジオの臨時ニュースが日本の真珠湾攻撃を伝えた朝、札幌は雪が降っていました。宮澤弘幸さんは円山の下宿先から北大構内の英語教師、米国人ハロルド・レーンさん、ポーリン・レーン夫妻の家に駆けつけました。

「国と国とは戦争関係になりましたが、私たちの間の友情は変わりません」宮澤さんはそう告げて玄関を出たとき、特高刑事に取り囲まれました。別の刑事たちは夫妻宅に踏み込み2人を札幌署に連行しました。

翌朝の「北海タイムス」は「謀略活動を徹底的に覆滅するため、内偵中の外諜被疑者に一斉検挙を断行した」と報道しました。外諜とは敵のスパイという意味です。8日から翌年にかけて全国で検挙された人は178人で、うち日本人は61人です。北海道では10人。「レーン・宮沢事件」では宮澤さんら3人の他に4人が逮捕されましたが、3人は懲役2年（1人は執行猶予）、1人は嫌疑不十分で釈放でした。

国境を越えた師弟の絆

宮澤さんは1919年8月8日東京府代々幡（よよはた）町生まれ。兄は夭折。弟晃（ひろし）、妹美江子がいました。

37年北大予科に入学し、工学部電気工学科に進みました。宮澤さんは語学が得意で子どもの頃から英語を学び、大学では外人講師や友人からドイツ語、フランス語、イタリア語、さらに中国語、ロシア語なども学ぶという有能な学生でした。語学を学ぶに相応しいサークルも出来ていました。米、独、仏、伊の外人講師と日本人北大生の間に尊敬と信頼に結ばれた師友の絆「心の会」（ソシエテ・デュ・クール）という集まりでした。第2次大戦が始まっていた中での、この小さな平和な世界を特高や憲兵は許すはずがありません。

また宮澤さんは子どもの頃から無類の旅行好きでした。北大に入ってからも39年に樺太大泊の海軍工事現場で勤労奉仕。引き続き敷香（しすか）オタスの杜（もり）へ。翌年は満州へ。41年には日高の二風谷（にぶたに）、千島へ、再び樺太、満州へ。オタスの杜とはウイルタやニブヒなどの少数民族の集落です。二風谷も含めて宮澤さんは北方少数民族への強い関心を持っていました。

しかし単なる関心でなくアイヌの貧困問題に関心を持ち、満州については「満州帝国は独立国に非ず」「レーニン」の農村電化を「大いに学ぶべきであろう」などと言っていました。これらの旅行での見聞、旅行談をレーン先生らに話したことが「軍機保護法」や「陸軍刑法」違反の罪にデッチ上げられることになりました。

スパイ容疑を確固として否認

宮澤さんは、札幌、夕張、江別の警察署に回され、裸で「両足首を麻縄で縛られ、逆さに吊るされて」竹刀で叩かれた、「両手を後に縛られて、それに棒を差し込んで痛めつけられ」るという拷問を受けた（戦後、美江子さんが聞いた）ので、斎藤忠雄という弁護士は「認めた方がよい。さもないと殺される」と勧めたといいます。

このことは、宮澤さんは、容疑を確固として否認していたのであり、求刑の無期懲役を判決では軽くせざるを得なかったのです。42年、宮澤さんとハロルドさんは懲役15年、ポーリンさんは12年の重刑を科せられ、宮澤さんは網走刑務所へ送られます。網走では非転向の思想犯を収容する独居房に収容されていました。

レーン夫妻は43年9月に「日米交換船」で帰国し、戦後の51年に北大講師として戻ってきました。

しかし、宮澤さんは網走の酷寒と虐待で肺結核と脚気に冒され、戦後釈放されるも、47年2月22日に帰らぬ人となりました。享年27歳でした。

（宮田　汎）